

## 0歳からの異年齢保育と子どもの発達（1）

社福）法人 光の園 発寒ひかり保育園 園長 吉田 行男（注1） 副主任保育士 家村 維人

### I はじめに

#### 1 子どもの育ちの危機

かつての多人数のきょうだい間の育ち合いや、乳幼児を含めた地域の異年齢子ども集団における多様で重層的な人間関係と相互交渉は、子どもの自立や思いやりなどの向社会性をはじめ、その心の発達に大きな役割を果たしてきたと考えられる。しかし、近年の核家族・少子社会や他者との関わりを必要としない遊びの質の変化などに伴い、かつての地域の異年齢子ども集団は消失してしまったと言っても過言ではない。

これらの結果が、今日の子ども・青年の全人格的発達の阻害という危機的状況や教育・社会問題をひきおこしている一因となっているのではないかと思われる。また、近年の若者や子育て世代、ひいては日本社会全体の養育性形成不全の問題とも無関係ではない（陳 2007）。

#### 2 実践・研究の経過

当園では、「みんなきょうだい大きな家族」をテーマに、愛情に満ちた家庭的な保育の下、子どもの全人格的発達を保障しようと、20年前より異年齢保育の実践・研究に取り組んできた。

2002年よりは、2歳児から5歳児（注2）までの毎日の生活グループでの異年齢保育を実践し、子どもの発達に及ぼす影響について、他園の同年齢保育との比較としてまとめ、公表した（吉田 2008、2010 注3）。本編Ⅱの実証研究（1）で、その概略を紹介する。

さらに、2015年よりは生後57日（産休明け）の0歳児から5歳児までの生活グループでの異年齢保育を始め、3年となる。子どもたちの相互交渉はさらに豊かなものとなり、一昔前の大家族や地域異年齢子ども集団に見られるような人間関係の深まりと広がりを見せるようになった。この3年間の取組がその後の子どもの発達に及ぼした影響について、過去の当園の2歳児からの異年齢保育と比較実証することが今回の研究発表（2）のテーマである。

#### 3 実践・研究の条件

異年齢保育の実りある成果を得るため、次の条件を設定している

- ① 子どもの主体性を尊重する（関わりを強制しない）
- ② 毎日の生活を共にする
- ③ 2歳児以下の子どもを含める（お世話されたくない3歳児以上の構成は有害）
- ④ 年齢別のクラス活動を保障する
- ⑤ 生活・遊びの適切な環境構成等



大好きなお姉ちゃん（5歳児）に抱かれて泣き止む0歳児

（注1）藤女子大学・札幌学院大学非常勤講師

（注2）本稿で用いる年齢は、4月1日の同年齢クラスにおける年齢である。「赤ちゃん」「乳児」は、0・1歳児とする。

（注3）「異年齢保育と子どもの発達—年齢構成条件が異なる保育における相互交渉パターンの比較から—」（2008 北海道大学大学院修士論文）、「異年齢生活小グループと子どもの発達—年齢別保育との比較から—」（2010 日本保育学会発表）

## II 過去の実証研究（1）の概略紹介

### 「同年齢保育と異年齢保育との比較」

#### 1 研究の目的

同年齢保育を主とした保育園（2園）と、当園の異年齢生活グループを基盤とした保育双方における子どもたちの相互交渉パターンの特徴の比較とアンケート調査から、異年齢保育における子どもの心の発達を明らかにする。

#### 2 研究の方法

（1）上記3園のビデオ観察によってそれぞれの特徴的な相互交渉パターンを抽出し、数量化した上で比較する。

（2）札幌市及び周辺地域において異年齢保育を実践する公・私立認可保育園117園からのアンケート実施調査結果を集約・分析し、基礎資料とする。

#### 3 研究の期間

ビデオ観察は2006年10月から2008年11月まで、アンケートの対象時期は2007年7月1日である。

#### 4 結果と考察（概略）

##### （1）比較に用いた相互交渉（関わり）の категорияとその内容

（表1）

相互交渉の категорияとその内容

category名	具体的な内容
教育的相互交渉	遊びや生活や人間関係のルール・方法・技術などを教える。聞く・学ぶ。それらに伴う指示、注意、諭す、叱責、賞讃等とそれらへの反応等の関わり。
養護的相互交渉	食事・排泄・睡眠等の生理的欲求や、愛情・信頼等の心理的な欲求を受容的・親和的に充足する等の関わり。
愛着行動	特定の相手による強い情緒的結びつきが感じられる等の関わり。
協調的相互交渉	一緒に協力して仲良く遊ぶ。助け合う。ケンカの仲裁をする。他者に関心を持ち、他者を理解し・認め・受容する等の関わり。
競争的相互交渉	順番や優劣を競う。物を取り合う。自己主張の衝突で口げんかや力を行ってケンカする。訴え。プライドを傷つけられないために、他者の援助を断る等の関わり。
攻撃的相互交渉	いじめ・攻撃・排除、非難・中傷、悪意の告げ口、それらへの同調等の関わり。



1歳児が0歳児に頬ずりし喜び合う



朝、2歳児を迎える3歳児

## (2) 同年齢保育と異年齢保育との相互交渉パターンの特徴

(表 2) 同年齢保育と異年齢保育との相互交渉パターンの特徴

	同年齢保育	異年齢保育
保育士と子ども	<ul style="list-style-type: none"> <li>保育士の子どもへの一方向的な教育的・養護的関わりが非常に多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保育士と子どもの相互交渉は相対的に少ない。年上の子どもたちがそれを補完している。</li> </ul>
異年齢間	<ul style="list-style-type: none"> <li>自由遊びや異年齢交流の場面でも（主体的な）相互交渉は、ほとんど見られない（例外：兄弟間、延長保育の子）。</li> <li>上の子から下の子への一方向的な攻撃的関わりが見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>協調的・養護的相互交渉、愛着行動が非常に多く見られる。</li> <li>生活・遊びの伝承を中心に教育的相互交渉も多い。</li> <li>競争的・攻撃的相互交渉は稀である。</li> </ul>
同年齢間	<ul style="list-style-type: none"> <li>協調的相互交渉が多い。</li> <li>競争的・攻撃的相互交渉が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>協調的相互交渉が多い（共同で低年齢児のお世話を含む）。</li> <li>競争的・攻撃的相互交渉はあまり見られない。</li> </ul>

## (3) 子どもの心の発達

毎日の生活場面における2歳児からの異年齢保育は、子どもたちに次のような心の発達を促している。

- ① 向社会性（思いやり、お世話、仲裁、生活・遊びの伝承等）
- ② 愛情関係（頻繁な愛着行動、兄弟・親子のような愛着・愛情関係の形成）
- ③ 受容性（遊びを壊す年下の子を受け入れ、工夫しながら遊びを展開する等）
- ④ 自立心（互いを尊重し、信頼し、喜び合う関係の中で自立心を養う）

## (4) 「共生の原理」

同年齢保育では、「競争原理」が支配的であるのに対し、異年齢保育では次のよう「共生原理」が支配的であると考えられる。

多様で重層的な人間関係⇒葛藤と育ち合い⇒上記(3)の①～④の豊かな発達⇒互いの人格の尊重⇒助け合い共に生きる「みんなきょうだい大きな家族」の形成



4歳児に甘える1歳児



3・4歳児に絵本を読み聞かせる5歳児

### III 今回の実証研究（2）の結果と考察

#### 「2歳児からの異年齢保育と0歳児からの異年齢保育との比較」

##### 1 研究の目的

本研究では、当保育園での過去の2歳児からの異年齢保育と比較して、0歳児からの異年齢保育が子どもたちの心の発達に及ぼすさらなる影響について明らかにする。

##### 2 研究の対象と方法

(1) 対象は、当園での3年間の0歳児～5歳児（4月1日におけるクラス年齢、以下同様）の異年齢の子どもの相互交渉である。方法は、ビデオ観察及び保育士による日常の観察記録・アンケートを収集・分析した結果と、2歳児からの異年齢保育の実証結果とを比較検討する。

(2) 新しく注目した「自己肯定感」については、0歳児から5歳児の異年齢保育を実践する2園と、同年齢保育を実践する4園のいずれも5歳児へのアンケート調査を実施する。その結果を比較検討し、参考資料とする。

##### 3 研究の期間

上記2の(1)の観察は、2015年4月より2018年3月までの3年間、保育士へのアンケートは2017年12月～2018年1月である。

また、2の(2)の5歳児へのアンケートは、2018年1月である。

##### 4 研究の結果

###### (1) 新出及び増加した主な相互交渉パターン

この3年間の0歳児からの異年齢保育の取組によって新しく出てきたり、以前よりも増えた子どもたちの相互交渉パターンの主なものを次に整理する。



(表3) 新出・増加した主な相互交渉パターンの内容

###### 【愛着行動】

優しい表情・声掛けを伴いながら、頭や顔や体をなでる、頬ずりする、泣く子をあやす、抱く、抱き合う、手をつなぐ等、互いに慕い合い、信頼し合い、甘え合う（心の安定をはかっている事例が多い）。

###### 【養護的相互交渉】

①生活全般に関する援助＝食事等の準備（配膳、エプロン等）、昼食・おやつ摂取、排泄の誘導、手洗い、鼻水を拭く、衣服・靴等の着脱、移動の誘導、入眠を促す（背中を軽くさする・マッサージなど）等、②見守り、③年下の子も年上の子に甘え、求める。

※付記・これらは自発的なものである。

・各相互交渉は他の交渉と一体的であることが多い。

・4～5歳児ともなると、年下の子の能力・自発性を尊重しながら援助する子が増える。

###### (2) 主な具体事例

一日の生活・遊びの中での主な相互交渉の具体的な事例を、以下場面ごとに整理する。

当園では、0～5歳児21～25人程で担任3名の異年齢生活グループを「ファミリー」と呼んでいる。各場面は、準備・片付け等の前後を含む。

## ① [受託から朝の会]

◎乳児（0歳～1歳児）の落ち着いた環境を保障するため、基本、乳児と幼児の受け入れと遊びの空間を分けている。

- ・ 幼児で、乳児と遊びたい・保育士に甘えたい・静かに過ごしたい子等が乳児の空間で落ち着いて過ごしている。
- ・ 0歳児が入室してくると、1歳児が「〇〇くん（ちゃん）おはよう！」と駆け寄り、頬をつけたり、なでたり、ハグしたりする。0歳児も笑顔で応じる。1歳児がその0歳児のカバンを運ぶ。他の0歳児も手伝おうとする。
- ・ 入室を渋る2歳児が、母親に「（0歳児の）〇〇ちゃん、もうきてるんじゃない」と言われると、シャキッと準備を始める。
- ・ ベッドに寝ている産休明けの子に、上の子たちが寄ってきて「かわいい」と手に触れたり、お腹を撫でたり、ジーッと見つめたりしている。
- ・ 休みが続き、泣きながら登園してきた3歳児の顔を2歳児がのぞき込みながら、「おはよう。だいじょうぶだよ～」と声を掛けると、3歳児が泣き止む。
- ・ 朝の会の時間になると、4・5歳児が、0・1歳児を抱っこしたり手を引いたりして、集合場所に連れて行き、前に座らせたり、そのまま抱っこして保育士の話を落ち着いて聞けるようお世話する。



## ② [活動・自由遊び]

- ・ 異年齢選択活動の日は、年上の子が年下の子に、その日の遊びのメニューを分かり易く伝え、どの遊びをしたいか聞いたり、相談したりする。
- ・ 保育士が子どもたちに「トイレだよー」と声を掛けると、4・5歳児が自発的に1・2歳児の手を引いてトイレに誘い、衣服の着脱や手洗いの仕方を優しく丁寧に教えたり、できないところを手伝ったりする。
- ・ 年上の子が主に1・2歳児の外遊びの準備等（靴下、ジャンパー、靴などの着脱他）を手伝い、手を繋いでグラウンドやお散歩に出る。初めは、おせっかいや年下の子のお世話されたくない時期等でマッチングしない場合が多いが、年上の子が経験を積み、その心理や状況を理解し、尊重して関わるようになってくる。
- ・ 折り紙や工作など年下の子が「できない」と言うと、年上の子が「どれどれ」と言って教えたり、手伝ったりする。特に5歳児は、全部手伝うのではなく、教えたり、見守ったり、難しいところを手伝い、本人が自分で完成するように導く。
- ・ ファミリーの活動中、保育士が0歳児を抱き、童謡の「ぞうさん」を歌う。そこに5歳児が1人加わって、優しく、ゆっくり一緒に歌う。0歳児は、その5歳児を見つめながら口を開き、初めて「ぞうさん」を歌う。5歳児は「かわいいね」とニンマリ。近くにいた他の5歳児2人と4歳児1人も「なになに？」と興味津々で加わる。保育士が「もう一度歌おうか」と促し、0歳児と一緒に4・5歳児も「ぞうさん」を歌う。その0歳児が初めて「ぞうさん」を歌ったのを見て、みんな「すごいねえ」「かわいい」と



3歳児が2歳児に靴を履かせる。

ニコニコ笑顔になる。その0歳児も「へへえー」と笑う。

- ・ ファミリーのクッキングで、離乳食用として煮込んだロケット形のにんじんを0歳児が食べる様子を、ファミリーの子どもたち全員が優しい目で見守る。
- ・ 乳児ら低年齢児の一つひとつの成長（這う、歩く、食の移行、好き嫌いの克服、トイレトレーニングの成功等々）を、ファミリーのみんなが一緒になって「おめでとう」などと言いながら喜び合う。
- ・ 4・5歳児が、クラス活動を終えてファミリーの部屋に戻ってくると、「ただいまー」とみんなに声を掛け、0歳児に近寄り、優しく「ただいまー」と言いながら、頭を撫でたり、ハグしたりして「かわいい」と言う。他の子たちも「おかえりー」と応じ、「今日なにをしたの」と活動内容をたずねる。
- ・ 5歳児が、クラス活動で覚えてきた遊びを、さっそくファミリーの年下の子たちに教え、一緒に楽しく遊び、年下の子たちが喜ぶのを見て5歳児も満足する。
- ・ 積木などを小さな子に壊されるため、初めは「だめでしょ」、「こっちこないで」と言っていた大きな子たちが、徐々に小さい子たちの特性や気持ちを理解し、叱らずに相手に合わせて「こっちであそぶんだよ」と優しく言い、抱っこして違うスペースに連れて行ったり、「これはこわしいよ」と招き入れたり、「これかしてあげる」と近くで遊べるよう工夫したりしている。

### ③〔食事・授乳〕

- ・ 4・5歳児が1歳児に手洗いやうがいの仕方を丁寧に教える。それを見ていた2歳児が「できなーい」「やってー」と甘える。
- ・ 4・5歳児がすすんでテーブルの消毒をしたり、低年齢児の配膳を手伝う。3歳児も「おてつだいしたい」と保育士に声を掛け、できそうなことを手伝う。
- ・ 1・2歳児が保育士に声を掛けられながら苦手な食材を食べ渋っていると、3～5歳児の年上の子が「おいしいよ」「えいようあるんだよ」などと声を掛ける。すると1・2歳児は自ら食べたり、特定の年上の子が食べさせると食べる。
- ・ 年下の子が「おかわり」と立ち上がると、盛付が難しい場合は、「おにいちゃん（おねえちゃん） やってあげる」「これくらいでいい？」と欲しい量を確認して盛り付ける。
- ・ 低年齢児が食器に少量残っているご飯などを食べずらそうにしていると、年上の子が「あつまれ、あつまれ」と言いながら集めて、子どもに合わせて「ハイ」と食器を渡したり、食べさせたりする。
- ・ 保育士が0歳児に離乳食を食べさせているのをジーンと見ていた1歳児が「たべさせていい？」と聞き、「うん 少しだけね」と言われ、保育士の真似をして上手に食べさせ、満足する。
- ・ 5歳児ともなると、保育士にお願いして、離乳食の食べさせ方を教わり、関係のできている0歳児に上手に離乳食を食べさせる。



- ・ 去年まで保育室内を走り回っていたある4歳児は、保育士が0歳児にミルクを授乳しているのを見て、近くで大声を出している2歳児に「いま、ミルクのんでいるよ。シーツ」と注意する。
- ・ 保育士が0歳児に授乳している様子をジーンと見つめていた4歳児が、「せんせい、てつだっていい？」と聞き、「いいよ」と言われると哺乳瓶の底の方を持って「ゴクゴクのんでいるね」と嬉しそうに言う。他の上の子たちも集まってきてニコニコしながら見守る。

#### ④〔午睡〕

- ・ 年上の子は、先に布団に入っている0歳児からの年下の子に寄り添い、体を撫でたり、軽く体をトントン叩いたりする。4・5歳児は、興味津々で自ら保育士に教えてもらったベビーマッサージをしたりして寝かしつける。
- ・ ある1歳児は、「〇〇ちゃんがいい」と指名する。
- ・ 年下の子が眠ると、1～3歳児は、4・5歳児が来てくれるのを待つ。
- ・ 年上の子は、相手の子が眠ると嬉しそうに「〇〇くん、ねたよー」と保育士に報告する。「ありがとう」と言われると、嬉しそうにしてまた他の子に寄り添う。
- ・ 午睡明け、なかなか起きれない子を年上の子が起こす。4・5歳児は、低年齢児の排泄を手伝ったり、布団の片付けを手伝う。



ベビーマッサージ



## 5 考察

### (1) 相互交渉の年齢間の広がり

これまでの2歳児からのファミリーに、0～1歳児が加わったことで、年齢間の相互交渉が格段に広がった。

どちらかというとお世話される対象であった2歳児や、中途半端な立ち位置にあった3歳児、それに1歳児までもが自然に、あるいは4・5歳児をモデルにしながら年下の子と関わりを持つようになった。当然ながら年下の子も年上の子との関わりを喜び慕っている。

### (2) 相互交渉の豊かさ

上記の表3や具体事例からも分かるように、過去の実証研究(1)で用いた相互交渉のカテゴリーで分類すると、愛着行動、養護的・教育的・協調的相互交渉のどれをとっても、2歳児からの異年齢保育に比べて、事象がより豊富でより頻繁になっている。特に、愛着行動と養護的相互交渉に新出・増加したものが著しい。

競争的・攻撃的相互交渉は、乳児期に特徴的なかみつき・ひっかきに加わったが、基本的には異年齢間のそれは依然少ない。

### (3) 心の発達の深化と向上

実証研究(1)で明らかになった2歳児からの異年齢保育において育まれていた向社会性、愛情関係、受容性、自立心は、0歳児からの異年齢保育においてより深まり高められると共に、発達の早まりを見せている。

さらに、心の発達の新たな注目点として、自己肯定感の醸成を加えたい。

## ①向社会性

人間の乳児は、動物の中で最も未熟な存在として生まれ、その生存を全く他者に依存している。また、その体型的特徴とも相まって可愛く、自然にお世話したくなる。

年上の子は、乳児を中心に年下の子を可愛がり、優しくお世話し、ファミリーの年上の子同士が協力して年下の子に生活習慣や遊びや人間関係の調整などについて教え、諭し、誉め、叱り、励ます。

年下の子も初めは年上の子に甘え、依存しながらも年上の子から学んだ通り年下の子に接したり、年上の子ともと対等に遊んだり、やり合ったり、時には逆に年上の子を慰めたり励ましたりしている。

特に4・5歳児のコミュニケーション能力と、人間関係調整能力が非常に高くなっている。

ともすると競争関係が支配的となりやすく、トラブルが断えない同年齢間においても、互いに思いやり、甘え合い、助け合い、年下の子たちの成長を喜び合う姿が多くなった。



ファミリーのお父さん・お母さん  
(5歳児)と赤ちゃんたち

## ②愛情関係

この3年間の0歳児からの異年齢保育の取組の中で、新しく出現したり、増加した相互交渉パターンとその内容は表3に示した通りである。

乳児と幼児、乳児同士が互いに愛着行動を繰り返し、甘え合う姿。年上の子が年下の子に対し、生活全般に関する援助をしたり見守る姿。また生活習慣や遊びや人間関係の調整等を教え導く姿が格段に増えた。特定の子ども同士に強い愛着関係が生まれており、ハイハイやヨチヨチ歩きで、4・5歳児の後追いをする子もいる。

<エピソード> 1歳児のH君は、保育士に何か注意をされると必ず泣きながら、5歳児のMちゃんに助けを求める。Mちゃんも自らH君に寄り添い、抱きしめ、なだめる。Mちゃんは、小さい時から年上の子に優しくされ、可愛がられ思いやりの心を育んできた。年下の子の気持ちを汲みとり、慰め励ましている。Mちゃんは、H君の母港であり、まるで母親のような存在である。

<エピソード> 同年齢の活動の中でなにかトラブルがあったのか3歳児のR君が突然泣きながら、ファミリーの保育室に戻ってきて、日頃から可愛がっている0歳児のMちゃんの前に座り、その頬を両手でなでながら「Mちゃん」と言い、ギュッと抱きしめた。少し経って、気持ちを安定させたのかR君は泣き止み、またクラス活動に戻った。

さらに、自身の発達や家庭環境等に問題を抱えている子が、乳児を可愛いがったり、年上の子に深く愛されることによって、お互いに癒しいやされていると見られる事例も多い。

このように、0歳児からの異年齢保育では、2歳児からの異年齢保育と比較して、擬似きょうだい・親子のような愛情関係を築き深めている例が増えている。



大好きなお姉ちゃん(5歳児)に  
くっついて離れない3歳児

## ③受容性

2歳児からの異年齢保育においても、年齢相応に身の自立ができていない子、自己中心的な子、イヤイヤ期(当園では、「独立宣言期」と呼んでいる)の子、発達が遅い子、家庭背景等で心に問題を抱えている子等があり、多様で重層的な人間関係が存在していた。

しかし、生命の保持のために全面的な介助・養護を必要とする0歳児産休明けを含む乳児が異年齢生活グループ(ファミリー)に加わることで、構成員の多様で重層的な人間関係は、一気に広がり複雑と



なった。

年上の子にとって、乳児との相互交渉は楽しさだけでは済まない。乳児は、何でも興味関心を持ち、お構いなしに積木や遊びを壊す。初めは叱ったり「あっち行って」と言っていた年上の子たちも、そのうち乳児の特性や心理を理解し、年下の子も一緒に楽しめる工夫をするようになる。

特に、年上の子にとって一番辛いのは、今まで可愛がってきた子が「イヤイヤ」「ジブンデジブンデ」の独立宣言期に入ってきた時である。初めは内心「なんで?」「ぼく（わたし）がきらいになったの?」と悲しくなってしまう。しかし、徐々に「できたときに、すごくうれしかおする」「できることは、じぶんでやりたいんだ」と、その時期の子どもの心理を理解するようになる。人間関係におけるこのような葛藤は、人間の成長にとって欠かせない。

こうして、最初はおせっかいだった養護的・教育的関わりも、相手の心理・能力を見極め、その主体性を尊重して関わられるようになっていく。4・5歳児ともなると、その過程で、忍耐力と知力をつけ、もてるコミュニケーション能力・人間関係調整能力を精一杯発揮して、寛容な態度を身に付け・受容性をさらに高めている。



#### ④自立心

3年前に0・1歳児だった子が3年経って、3・4歳児となった。彼らは、乳児期から年上の子の身近なモデルがあり、その養護的・教育的関わりによって食事や排泄等の身辺自立や、基本的生活習慣等の自立が早まっている。

乳児期に、保育士だけでなく年上の子たちの愛情深い関わりと母港化を通して、愛着形成と依存がより保証されてきた。そのことで、さらに自立心が養われているのではないかと考えられる。同時に、年長児の自覚や責任感も高まっている。前述の受容性の高まりで論じたように、年上の子、特に年長児は、培ってきたコミュニケーション能力と人間関係調整能力、そして知力を発揮して、ことの善し悪しを判断し、相手の主体性すなわち人格を尊重して関わることのできる真の自立心をさらに養っていると思われる。

#### ⑤ 自己肯定感

心の発達についての新たな注目点として、自己肯定感の醸成をあげたい。この点に初めて気付いたのは、「異年齢保育卒園生の追跡調査」(注4)について討議していた時である。当園の卒園生が休みの日などに「お兄さん・お姉さんせんせい」として保育参加する姿の中にそれを見出した。そして、0歳からの異年齢保育を経験した卒園生の参加がどんどん増えてきた。

2歳児からの異年齢保育においてもその萌芽はあった。しかし、ファミリーに乳児が加わってからは、特に年上の子の自己有用感・肯定感が醸成されていることを強く意識させられている。

年上の子たちは、赤ちゃんが可愛くて仕方ない。愛着・愛情関係が築かれ、慕われ、信頼されるようになるとなおさらだ。それに、赤ちゃんの日々の成長・発達の一つひとつが何よりの喜びだ。

年上の子たちは、保育士に「〇〇ちゃん、なきやんだ」「〇〇くん、ねたよー」「りにゅうしょく、ぜんぶたべましたー」「あかちゃん、ハイハイした」「ワー、たったー」と共感を求めたり報告したりする。それに対して保育士からは、「本当だね」「ありがとう」「上手だね」「助かったよ」などと喜ばれ、誉められ、感謝される。そう言われた年上の子たちは、本当に満足気だ。

年下の子に喜んでもらい、そして役立っている。先生からも喜ばれ、感謝され、その手助けになっていることを自覚する。すなわち、自己有用感である。その喜びは大きい。ますますやり甲斐を感じる。

これらの経験の積み重ねの中で自己肯定感が醸成されているのではないかと推測している。

同年齢保育と0歳児からの異年齢保育における5歳児同士の比較アンケート調査の結果からも、主に自己有用感についてかなりの有意差が出た。

(表4) 自己有用感についての比較 (5歳児よりの聞き取りアンケート)

質問 / 回答	同年齢保育	0歳からの異年齢保育
「赤ちゃん(0歳児)のお世話をしたり遊んだりしたことはありますか」		
・ たくさんある	37.3%	68.8%
・ 少しある	28.0%	22.9%
「それはなぜですか」		
・ 喜んでくれるから	13.3%	64.6%
・ 泣いているときなどかわいそうだから	5.3%	60.4%
・ 役に立ちたいから	6.7%	54.2%
・ 助けたいから	10.7%	47.9%
・ 親や先生のお手伝いをしたいから	14.7%	41.7%
・ 頼りにされているから	6.7%	35.4%
・ 可愛いから	48.0%	79.2%
・ 自分も年上の子にしてもらっていたから	5.3%	39.6%
・ 親や先生に頼まれるから	4.0%	25.0%
「自分は周りの人から褒められることはありますか」		
・ たくさん褒められる	41.3%	47.9%
・ 少し褒められる	45.3%	39.6%

#### (4) 共生の原理

乳児は、保育士にとって子どもたちの中で最も手のかかる存在である。しかし、年上の子たちは、保育士から「〇〇ちゃんの靴下持ってきてくれる」等の頼みごとはされても、乳児を可愛がりお世話をすることを強制されることはない。にもかかわらず、自主的に喜んで乳児のお世話をしている。

一昔前の大家族の中では、大人の手の廻らないところを、年上の子が協力して自然に親の代わりに子育ての手伝いをしていた。年が離れていると兄・姉と言うよりは、まるで父親・母親のような存在である。0歳児からの異年齢保育は、そのような大家族を彷彿とさせる。まさに家族全員が助け合い、共に生き、育ち合うような関係がより鮮明となってきた。さらに、前述したように「競争原理」に支配されがちな同年齢の関係も、お互いに思いやり助け合う関係に変容しつつある。

名実共に「みんなきょうだい大きな家族」が形成されつつあることを実感している。



これからファミリーでクッキングで〜す。

## 6 結論と課題

### (1) 結論

#### ①心の発達<sup>4)</sup>の深化と向上

同年齢保育との比較実証の結果、2歳児からの異年齢保育において育まれていた向社会性、愛情関係、受容性、自立心は、0歳児からの異年齢保育においてさらに深まり、高まると共に、発達の早まりを見せている。

異年齢の子どもたちの間に広くきょうだい・親子のような愛着関係が形成されている。とりわけ発達や環境に問題を抱えている子を中心に、頼りたよられ癒しいやされて心の安定を図るなど、さらに深い愛情関係を築いている事例が多く見られる。

#### ②自己肯定感<sup>4)</sup>の醸成

5歳年長児に自己有用感が高く、自己肯定感が醸成されていることが推測される。

青少年の国際比較調査などで、日本の子ども・青年の自己肯定感が非常に低いことが論じられている。近年の若者の早期離職、メンタル面の弱さ、引きこもり・自殺の増加等と何らかの因果関係があるのではなかろうか。今日のわが国の子育て・教育についての重要なテーマの一つである。さらに多角的に研究を深めたい。

#### ③「共生の原理」の鮮明化

0歳児からの異年齢保育においては、大家族の中で子どもたちもその一員として赤ちゃんの育児等の手助けをし、大人を含めて共に生き、共に育ち合う姿を鮮明にしている。

同時に、同年齢間の人間関係をも共生的なものに変容させつつある。

### (2) 課題

今後の実践上の課題として、次の2つをあげたい。

①職員の学び・実践・研究の継続により、さらに力量を高め、連携を深めること。

②乳児がより落ち着いた生活ができる環境構成のさらなる配慮・工夫。

異年齢保育という形に、深い愛情と洞察力、そして高度な配慮と工夫という魂を込める不断努力が必要であることを自戒している。

---

(注4)「異年齢保育卒園生の追跡調査」(家村・吉田 2018 本大会発表) 参照